
なんでもいいとかってさ

Hz

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なんでもいいとかってさ

【Nコード】

N1445R

【作者名】

HZ

【あらすじ】

「なんでもいい」そう言わないでくれよ。

「今日どこいく？ ゲーセンでも買物でも、持ち合わせそれなりにあるから遠慮なく言ってくれよ」

「んー、なんでもいいよ」

なんでもいいとか、卑怯だと思わないか。

「いやいや、なんでもいいじゃ困るんだ。行きたいところとかやりたいところとか、ないのか？」

「あたしも暇だし持ち合わせもあるし、拓真たくまが行きたいところではないんだけど」

「えー……………優花ゆうかっていつでもそうだよな。どこでもいい、なんでもいい、なんでもかんでも俺まかせじゃん？」

正直俺自身デートプランがネタ切れなのだ。

クリスマス前やお正月ならイルミネーションを見たり初詣に行ったりすればいいし、夏ならプールに行けばそれなりに楽しめるのだが、三月から六月の間、九月から十一月の間は本当に何をすればいいのか分からない。

五月の今、俺は猛烈に迷っている。

俺達は今お互いの定期が通っている駅で待ち合わせをしたばかりだ。天気は良いし、あたたかい。……………つまり、寒いから建物の中で適当にブラブラという選択肢に自然となるのが難しいのだ。

公園でクレープを食べてもいいし、野原でごろんとしてもいい。やっていいことが多すぎてどれがいいかしばれない。

優花とは中学三年の初めのころ、塾が一緒だったことがきっかけで付き合うようになった。一緒の高校へ通い、お互い今高校二年生

だ。

受験に追われることも、先輩の目を異様に気にすることもない、自由な二年生。

言い方を変えれば、暇すぎる二年生。

そして付き合って約三年の俺達。特別大きな喧嘩もなく比較的安定している今。

言い方を変えれば、マンネリだ。

「だって、本当だもん。あたしどこだっていいの」

「じゃあ、適当にファーストフード食べて、おしゃべりする？」

「えー……」

おい誰だ、なんでもいって言った奴。そんな思いをこめた瞳で優花をじつと見つめた。

淡いピンクの、袖の一部がレースで透けているカットソー。ふわっとしたデニム地のミニスカート、小さなリボンがついでいる黒いレギンス。

いつも男っぽい色の服しか着ない優花がピンクを着ている。最近マンネリだからこだわってみたのだろうか、それとも五月でだいぶ温かくなってきたから去年セールで買った服をおろしてきたのだろうか。

わからない。優花が読めない。

いやいやいやいや待て、感じるんだ！

オンナノコ、オンナノコの心を読むんだ！これは彼女からのサインかもしれない！

「……わかった、じゃあ買い物はどうだ？ あそこのショッピング

モール、最近行ってなかっただろ？」
「ごめん、先週友達と行ったんだ」

沈黙。

沈黙。

隣をつるさい子供が走っていく。ああ、そんな大声で下品なセリフを言うのはやめてくれ。

そして旅行客らしいおばちゃん、あんたらも特徴的なイントネーションで大騒ぎしないでくれ。

考える、考える。お洒落している優花、きつと出かけたに違いない。

「ゲーセンは？ ゾンビ撃つの、今度はラストエピソードまで頑張ってみないか？」

「ゾンビ飽きた。ってか、友達からラストエピソードのネタばれ聞いちゃったし、つまんない」

「此処あたりにかわいいカフェがあるらしいんだが、そこ行ってみるか？」

「あそこ？ ああ、外見はかわいいんだけど中はフツーだった。パフェ高かったし」

沈黙。

沈黙。

沈黙。

「……じゃあさ、どこがいいんだ？ もう俺は疲れた」

うなだれてみせる。ため息をつく。

付き合った当時、デートはお互いにとって胸が躍る日だった。一緒にいるだけで時間が流れるのが早く感じられて、ずっとこのままがいいと思っていた。

なんでだろう。なんでだろう。いつからだろう。デートがあまり楽しくなくなった。それどころか、苦痛になってきた。

もう、そろそろ潮時かもしれない。

「家……行きたい」

「は？」

顔を別の方向に向けて優花が言った。その横顔は前髪で横見えなかつたけれど、頬が少し赤い。恥ずかしいのだろうか。

普段サバサバしている優花が、ピンクの服を着ている。そういえばマニキュアもしている。うっすら化粧も施している。

「拓真の家、いいかな？」

「あ……うん、いいよ」

まじか。

まあ、いいんだけどな。家デートっていうのも、悪くないだろう。

「俺ん家汚いけど、それでもいいなら、行くか」

そう行つて優花の手を握つた。優花の手つて、こんなになめらかで小さかつたんだ、とぼんやり思つた。

なんでもいいとか言う女つてさ、心のどこかでこうしてほしい、ああしてほしいって思つてたりするんだ。

でもそれを自分からするのって、ドラマが無いというか、恥ずかしいというか。うまく表現できなくて、素直に言えなくて。

でもさ、男つて本当に鈍いんだ。やってほしそうなそぶりを見せられても、全く全然これっぽっちも気づかないんだ。いつもより服

装に気合を入れていたって、すげーな、としか思えないんだ。
なんでもいいとか、男にとってそれが一番めんどくさい言葉なん
だ。

だからさ、素直に打ち明けてくれないか。

そうしたらもっと、好きになれそうなのがするからさ。

(後書き)

「なんでもいい」

こう言われると戸惑います。

分かっていきます。分かってはいるんです。

でも考えるのがめんどくさいとき、出てくるんですよ口から。「なんでもいい」って。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1445r/>

なんでもいいとかってさ

2011年2月23日22時55分発行